

# Two-Hours' Traffic

—Gregory から読む『ロミオとジュリエット』—

川島 伸博

## 始まりの問題

Gregory という名前を聞いたなら何を連想するだろうか。不条理なるものに心惹かれる人ならば、ドイツ文学の名作、カフカの『変身』の主人公、グレゴリー・ザムザを思い浮かべるかもしれない。また教会音楽に興味のある人ならば、グレゴリー聖歌の澄んだ調べを思い起こすかもしれない。しかし、この名前を聞いて、シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』を思い浮かべる人は少ないのではないだろうか。英語を学ぶものであれば誰もが知るところの名作『ロミオとジュリエット』、この悲劇の冒頭を飾る名前こそ Gregory なのである。1幕1場キャピュレット家の家来2人がヴェローナの街に登場してくるところからこの劇は幕を開ける。片割れである Sampson が開口一番、その名を告げる。

Gregory, on my word, we'll not carry coals.

英文学の講義はたいてい、ここで「石炭を運ぶ」という行為が「屈辱をしのぶ」という意味であることを説明する。そのあと矢継ぎ早に続く、colliers (石炭を運ぶ人=いかさま野郎)、choler (胆汁=かんしゃく)、collar (輪)の駄洒落の解説が続く。この言葉遊びに感銘を覚えるものは英文学に惹かれ、うんざりするものは英文学の世界から遠ざかって行く。この意味で、英文学史上もっとも有名な悲劇の劈頭に置かれたこの台詞は、英文学という学問におけるリトマス試験紙の役割を果たしているのかもしれない。

しかし、このふざけた台詞、恋愛悲劇の冒頭を飾る言葉として、いかがなものだろうか。考えてみると、シェイクスピア劇の最初にくる言葉は、その劇のテーマを示唆する優れたものであることが多い。『ハムレット』は“Who's there?”という台詞で幕を開けるが、これはこの劇においてアイデンティ

ティの問題がテーマとなることを示している。また『リア王』の冒頭の台詞は“I thought the King had more affected the Duke of Albany than Cornwall”であるが、これは王の寵愛の有りが齎す悲劇の完璧な導入になっている。また文字通りの冒頭ではないが、『マクベス』における魔女達の台詞を思い出す人も多いだろう。“Fair is foul, and foul is fair”は、価値観が転倒していくこのスコットランドでの悲劇の通低音となる。『リチャード3世』の冒頭の台詞も忘れられない。“Now is the winter of our discontent Made glorious summer by this son of York”という最初の台詞とは裏腹に、この史劇はヨークのもう1人の息子 Richard による inglorious winter の物語であることが判明する。シェイクスピアは劇の冒頭から観客を強烈に劇世界へと巻き込んでいくテクニックを得意としているのだ。

このように他の作品の出だしと比較してみても、“Gregory, on my word”という始まり方のなおざり感は際立って見える。ロミオとジュリエットを除いたとしても、マキューシオやベンヴォーリオ、ティボルトやパリス、乳母や修道士といった魅惑的なキャラクターに満ち溢れるこの悲劇の中で、Gregory と Sampson はあまりに影が薄い(実際、この2人は1幕1場の後、2度と登場することはない)。そもそも Gregory と Sampson の名は、シェイクスピアが種本としたアーサー・ブルックの『ロウミアスとジュリエット』には出てこない。また、シェイクスピア劇が Gregory のような固有名詞で幕を開けることはきわめて稀である。なぜ、シェイクスピアはこの印象薄いキャラクターに Gregory と名付けたのか、そもそも何故、原典にはないキャピュレット家の家来をこの劇に導入し、あまつさえ、冒頭に置いているのだろうか。

この疑問に関して Steve Sohmer という学者が

新説を提唱している。その著作は *Shakespeare for the wiser sort* という人を喰ったタイトルで、またその手法も天文学のソフトを駆使するいかかわしいもの。突拍子で学界での評判はよろしくないが、なにしろ面白い。眉に唾をつけないと読めない代物であることは否めないが、怪しげな部分を削り、論の持って行き方を工夫しさえすれば、さらに重要な問題に切り込んでいけそう。以下、要点をまとめながら紹介してみる。英文学の講義を受けてリトマス試験紙が赤くなった人はさらに赤く、青くなった人は少しでも赤くなってくれば幸いである。

### 『ロミオとジュリエット』の時間構造

河合祥一郎氏もその入門書で指摘するように、この劇を読んで、まず気になるのが、劇を流れる時間の問題、2人が出会ってから死に至り、キャピュレットとモンタギューが和解するまでの日数である。3日間だと思っている人が多いのではないだろうか。河合氏は6日間の出来事だと断定しているが、これから示すように劇の台詞を忠実に読むと7日間の出来事ということになる。まずはその時間構造を確認していこう。

この劇の時間を考える上で重要なヒントを提供してくれるのが、3幕4場キャピュレットとパリスのやりとりである。ジュリエットとの求婚を迫るパリスにキャピュレットは水曜日に式を挙げることを提案するが、思い直して“What day is this?”とパリスに尋ねる。これに対しパリスが“Monday, my lord”と応え、式は水曜日では早過ぎるので木曜日に行われることに決まる。これが2日目なのは確実なので、ここから逆算し、この劇は日曜日の朝に幕開けしていることになる。ロミオとジュリエットはこの日の夜の舞踏会で出会い、有名なバルコニー・シーンが深夜に行われ、月曜日の午後には結婚、そのすぐ後にロミオはティボルトを殺害し、追放宣言を受ける。上述のキャピュレットとパリスのやりとりは、この日の夜に行われているわけだ。

何も知らない2人は月曜日の夜から火曜日の早朝にかけて初夜を過ごし、ロミオはマンチュアへと去る。その後すぐジュリエットは父親からパリスとの結婚を迫られ、修道士ロレンスに相談、彼から42時間仮死状態になる薬をもらう。そのときロレンスはこう言う。

Wednesday is tomorrow.  
Tomorrow night...Take thou this vial...  
And this distilled liquor drink thou off...

河合氏はジュリエットが薬を飲んだのは火曜日の夜としているが、ここは水曜日の夜にしないと辻褃が合わない。つまり空白の1日が生じるのである。そして木曜日の朝、ジュリエットの死が報じられ、服薬から42時間後の金曜日の夜、悲劇が起こる。そして翌朝、朝日のもとキャピュレットとモンタギューが和解して、日曜日の朝から土曜日の朝まで続くこの劇は幕を閉じるのである。

この曜日の構造は、もう1つ別の台詞に注目することで、日付まで特定することができる。1幕3場でキャピュレット夫人が乳母にジュリエットの年齢を尋ねる場面である。

Nurse: How long is it now to Lammastide?  
Wife: A fortnight and odd days.  
Nurse: Even or odd, of all days in the year,  
Come Lammas Eve at night shall she be  
fourteen.

Lammastide が8月1日、そのイヴがジュリエットの誕生日で7月31日、この会話が行われた日曜日はその二週間前なので7月15日ということになる。しかし、夫人のいう odd days というのが気になる。7月中旬ということは間違いないのだが、15日とまでは断定しづらい。

そこで Sohmer は乳母によるもう1つのヒントに注目する。ジュリエットの年齢を問われた乳母は、おしゃべりがとまらなくなり、彼女が乳離れしたときのことを以下のように回想する。

'Tis since the earthquake now eleven years,  
And she was weaned—I never shall forget it...

長らくシェイクスピア学者を悩まし続けてきた箇所である。この11年前の地震がいつどこで起きたかについては2つの説が有力。イギリスで1580年と1584年に地震があったという記録があり、そこからこの劇の上演をそれぞれ1591年、1595年と推定するものである。しかし、Sohmer が注目するのは、

1845年に発表されて以来看過されてきた Hunter の説である。Hunter によると Ferrara 近郊で大地震があり、余震も 100 回以上続いたという。そしてこの地震を記述する手紙が 1571 年に Thomas Purfoote によってロンドンで出版され、イギリスでも広く知られていたのだという。しかもこの手紙で使われる“overthrow”という単語は、この劇の重要な箇所でも 2 度使われている。またこの劇での地震の際、キャピュレット夫妻はマンチュアにいたということになっているが、この手紙には公爵夫妻がマンチュアに避難したという記述があり、符号が一致する。問題なのは、もし乳母の言う地震が 1570 年に起きたとするとその 11 年後は 1581 年になってしまい、シェイクスピア劇の上演としてはあまりに早過ぎる年代になってしまう点である。

### Sohmer の新説

ここで Sohmer はパラダイム・シフトを行う。乳母の地震は、劇の上演年代を示唆するのではなく、劇の時代設定を示唆しているのではないかと、問題の地震は詳しく言うと、1570 年の 11 月に起こったという。するとその 11 年後は 1581 年の 11 月から 1582 年の 11 月の間ということになる。乳母とキャピュレット夫人の会話は 7 月中旬に行われているのだから、この年は必然的に 1582 年となる。そしてこの年の 7 月 15 日が日曜日なのである。

ここで Sohmer はさらに大胆な仮説を立てる。1582 年は、ローマ教会がユリウス暦を廃止し、グレゴリオ暦を導入した年である。そのためこの年の 10 月からは 10 日間が差し引かれ、21 日しかなかったのだという。当時、この新しい暦の導入によって混乱が生じた。そのごたごたが、この劇の時間構造に特異性を与えているというのだ。商業に従事するものにとって日付が重要なのは言うまでもない。たとえばこの年の 7 月 15 日に金を貸したとして、半年後の返済期限は翌年の 1 月 15 日ではなく、1 月 25 日となる。この混乱をさけるために、市民達の一部は、グレゴリオ暦を前倒して導入していた可能性があるというのだ。つまり、Sohmer によると『ロミオとジュリエット』の登場人物達は 2 つの暦による時間を二重に生きていたということになる。

以下の表は彼の主張に従い、この劇の出来事を整理したものである。キャピュレットを代表とするグ

ループはグレゴリオ暦(G)、キャピュレット夫人を代表とするグループは依然としてユリウス暦(J)で行動していたと考えるとわかりやすい。

	J	G	出来事
1	15 日	25 水	午前 ヴェローナの騒動で幕開け 夜 舞踏会(出会いの場面)
2	16 月	26 木	深夜 パルコニー・シーン 午後 結婚→殺害→追放宣言
3	17 火	27 金	深夜 初夜→ロミオ、マンチュアへ 午後 ジュリエット、薬をもらう
4	18 水	28 土	
5	19 木	29 日	深夜 ジュリエット服薬 午後 ロミオ、毒購入
6	20 金	30 月	夜 ロミオ自殺 ジュリエット後追い自殺
7	21 土	31 火	朝 両家の和解 ジュリエットの誕生日(G)
	22 日	1 水	Lammastide(収穫祭)

そしてこの 2 つの暦を参照することで、この劇にあらわれる不自然な箇所を解決できると Sohmer は主張。その論法をみてみよう。

- 舞踏会でロミオが巡礼の扮装をしているのはなぜか。  
→グレゴリオ暦に従うと 7 月 25 日は聖ヤコブの祝日。その遺体はサンチアゴに奉納され、巡礼の地になっている。
- マンチュアでロミオが毒を買おうとしたとき、休日で薬局が休みになっているのはなぜか。  
→従来の解釈であれば、この日は木曜日であり、辻褄があわないが、グレゴリオ暦に従えば日曜日となり問題ない。
- 原典では 16 歳となっているジュリエットの年齢が 13 歳になっているのはなぜか。  
→彼女がロミオと結婚する日は、グレゴリオ暦に従えば 26 日で聖アンの祝日。マリアの母である聖アンの伝説によれば、マリアは 13 歳で結婚を命じられる。またその伝説に従えば、マリアもまたジュリエットと同じく 2 歳半まで乳離れしなかったという。
- 薬の効き目が 42 時間という中途半端な時間に

なっているのはなぜか。

→グレゴリオ暦に従えば、目覚めた翌日にジュリエットは14歳になる。これは当時、イギリスの法律で同意による結婚が認められる年であり、修道士ロレンスは、ジュリエットが目覚めてすぐ、2人で駆け落ちさせようと考えていたのではないか。薬の有効期間が42時間となっているのはそのためである。

- 5 毎年恒例の舞踏会を前日に主催したばかりのキャピュレットがパリに曜日を尋ねるのは不自然ではないか。

→キャピュレットはパリがどちらの暦で動く人間か確かめているのである。実際、月曜日と答えるパリスに対し、キャピュレットは“Monday, ha, ha, ha”と笑って答えている。これはパリスともあろうものが、古い暦にしたがっていることを皮肉っているのではないか。そもそもキャピュレットは式を水曜日に行うつもりだったわけで、これもグレゴリオ暦ならば1週間後ということになり、それならば納得がいく。

また、この2つの暦のズレによるトリックをシェイクスピアが意図的に利用していたことを示唆する台詞が2つ、この劇に隠されているという。まずは乳母がジュリエットの年齢を告げる場面。

I'll lay fourteen of my teeth—and yet to my teen  
be it spoken, I have but four—she's not fourteen.

自分の14本の歯を賭けて彼女は14にはなっていない。ただ、悲しいことに乳母の歯は4本しか残っていないという。この欠けてしまった10本の歯が、グレゴリオ暦移行によって失われる10日間を示唆しているというのだ。

ここまで来ればおわかりだろう。もう1つのヒントこそ、冒頭に掲げられるSampsonの台詞である。Sohmerの説は、この台詞の陳腐さに関する疑問を解いてくれる。

Gregory, on my word, we'll not carry coals.

劇の冒頭に掲げられたこの名前は、グレゴリオ暦を

導入したローマ教皇グレゴリウスを示唆し、この劇全体が新暦導入による混乱をテーマとすることを告げているのだという。また表における唯一空白の1日、グレゴリオ暦の7月28日は聖Sampsonの祝日にあたる。となると“we'll not carry coals”というSampsonの台詞は、この空白の1日をあらかじめ示唆しているようにも思える。だとすれば、劇を始めるにあたって、なかなかしゃれた方法、さすがシェイクスピアといわざるをえない。

そして、Gregoryという固有名詞で幕を開けることによって示唆される2つの時間というテーマは、この劇におけるプロット展開でも大きな役割を果たしていることがわかる。修道士ロレンスが送った手紙が伝染病のために届かず、ロミオが勘違いしてしまうこと。そしてほんのわずかな時間の差で互いに自殺してしまうロミオとジュリエットの悲劇。さらに、やたらと繰り返される時間への言及。概して時間の地殻変動が起るときには、時間への意識が高まるものだ。ロミオはティボルトを殺す場面で言う、“Tybalt, that an hour Hath been my cousin”と。またロミオ追放の知らせを聞いたとき、ジュリエットは叫ぶ、“I, thy three-hours wife”と。

## 2つの時間

学生時代にリトマス試験紙が赤く染まった人であれば、ここで疑問を投げかけるだろう。『ロミオとジュリエット』にはプロローグがあり、冒頭の言葉は厳密にはGregoryではないのではないかと、確かにそうである。“Two households both alike in dignity...”で始まるソネット形式による秀逸なプロローグを考慮に入れるのであれば、ここまでの議論は無駄骨のように思えてくる。しかし、Sohmerに成り代わって言えば、このプロローグにこそ、2つの時間を示唆する言葉が隠されているのである。

The fearful passage of their death-marked love,  
And the continuance of their parents' rage...  
Is now the two-hours' traffic of our stage;

当時の上演時間が2時間程度のものであったことを示す証拠としてよく取り上げられるこの“two-hours' traffic”という言葉は「2時間の行程」と

いう以外にも「2つの時間の行程」と取れないだろうか。

#### 参考文献

河合祥一郎 (2005) 『「ロミオとジュリエット」

恋に落ちる演劇術』みすず書房

Stephen Greenblatt, ed. (2008) *The Norton Shakespeare*, W.W. Norton & company, Inc.

Steve Sohmer (2007) *Shakespeare for the wiser sort*, Manchester UP

(大阪学院大学准教授)

